

謎の「大間のマグロ漁師」に 「小さな親切」実行章。 ついに、その正体が明らかに!?



大間と聞いて思い出すのは?

まずクイズから。

「ごらん、あれが●●●、北のはずれと〜」。

さて●●●に入るのはなんでしょう。

竜飛岬? 確かに歌詞ならそれが正解ですが、
青森県の地図をご覧ください。

実際の本州最北端はと言いますと、下北半島にある大間崎なのです。

北海道の南端よりも北にありますね。

そして大間と言うと誰もが思い浮かべるのが「マグロ」でしょう。

大間で獲れる本マグロは脂がのってやわらかく、
絶品とも言われています。

お正月になると、初競りで1匹数千万円という値がついて
にぎやかに報道されますので、ご存知の方は多いでしょう。

今回はそのマグロを釣っている漁師さんと、
「小さな親切」運動にまつわるお話です。

漁師なのか、
建設業者なのか。
謎はさらに深まる。



2011年、青森県にある6ヶ所の児童養護施設に多額の寄付金が寄せられました。しかし、差出人は「大間のマグロ漁師」と書かれているだけ。それから、毎年、寄付金は続きました。「誰なんだろうね」。この件はすぐに報道されましたので、大間町のみならず、青森県内では有名な話になりました。

この話を聞いた「小さな親切」運動青森県本部(事務局・青森銀行)は、「これは実行章を差し上げるべきだ。前例はないけれど、匿名のまま表彰しよう」と判断。こうして、対象者不明の実行章が、大間町の町



竹内正弘さん(左) 青森銀行大間支店 坂本大伸支店長(右)より実行章を贈呈

役場に飾られました。どうやら、この話はすぐに本人に届いたようです。これがきっかけになったのかはわかりませんが、ついに謎の人物の正体が明らかにになりました。その方は、竹内正弘さん(65歳)。あまり名乗り出たくはなかったようですが、騒ぎが大きくなりすぎるのを懸念されたとか。でも地元では、半ば正体がばれていたようです。そうそう誰もができる行為ではありませんからね。

対象者が判明したのですから、正規の実行章を贈呈しようと、竹内正弘さんの職場を訪ねました。が、会社のお名前は「株式会社 竹正工務店」。ここに顔で我々を出迎えてく

ださった竹内さんは、この会社の経営者でした。漁師さんじゃないんですか？

「いや、漁師ですよ」と竹内さん。いただいた名刺を改めて見ると、「漁業部 第56新栄丸」と書いてあります。

実は、竹内さんは先祖代々続く漁師の家のお生まれなのですが、三男坊だったため、

「父から『三人全員が漁師でもしよるが、お前は建設業をやれ』と言われまして」。

小学生の頃から漁に出て、海の上が大好きだった竹内さん。いくら親に言われたとはいえ、進路をあつさり決めたことに自分でも驚いたそうです。

こうして、建設業に身を投じた竹内さん。当時の青森県は建設ラッシュでもあり、30代半ばには独立して今の会社を創設しました。

「けれど、建設業ってのは波が大きいんですよ。ですから多角経営しなければ安定しない。それで漁の方も少しずつするようになって、漁業部になったというわけです」。

大間のマグロというときぞかし儲かるように感じますが、実際は専門の漁師さんでも続けていくのは大変

な世界です。釣れなければ船の維持費など、出費ばかりが高むのですから、リスクは大きいのです。言葉は悪いですが、二足のわらじで漁師は務まるのか？

と思いきや、竹内さんは漁師としての腕がよほどいいのでしょう。初競りで最高値のついたマグロを、これまで5回も釣り上げ

「タイガーマスク運動」に触発されて、寄付活動を開始。

竹内さんは、子どもたちをあたたくい目で見守る好々爺でもあります。

「だいぶ前から、地域の子どもたちに何かできないかと思っはいました」。

そんな折、目にしたのが「伊達直人」の名で児童養護施設などへランドセルを贈る「タイガーマスク運動」でした。これなら、私にもできると考えた竹内さんは、さっそく前述のような寄付活動を始めました。

「子どもというのは、社会の宝物なんです。次の日本を託す人たちですから、社会で育てないといけないと思います」と竹内さん。

寄付をされた施設の子どもたちも竹内さんに大感謝しているそうです

ています。

「今年の場合は本当に運がよくて、しつぽ側に針がかかった状態で釣れてしまいました。形もよくてトップを狙えるとすぐに思いました」

2017年1月5日の初競りで7420万円の値がついた212kgのマグロは、こうして釣られたのです。

から、もしかすると、漁師を目指す子が現れるかもしれませんね。ところで、漁師になるために必要な資質ってありますか？

「ありますね。第一に心配りができることではないでしょうか」。

船の上は職場でもあり、生活の場でもあります。こなすべき仕事は本当に多いのです。指示待ちしていたら、仕事になりませんし、転落などということもあるのですから、危険でもあります。自分の役割をしっかりこなすほか、周囲の様子を見て俊敏に動けないといけないのだそうです。実際に次ページの4コマ漫画のような経験を竹内さんもされているのですから、命がけなんですね。

謎の「大間のマグロ漁師」に
「小さな親切」実行章。
ついに、その正体が明らかか!?

実録・大間のマグロ漁師と奥様



この後、いったんは漁師を辞める決意をした竹内さんを励まし、新しい船を購入する億単位の資金をやりくりしたのは奥様だそうです。内助の功が光りますね。



安達幸平さん(現・青森スポーツクリエイション(株)総務部長)
URL <http://www.aomori-wats.jp>

今年も竹内さんは、児童養護施設に計300万円の寄付をするため、青森県庁で開かれた贈呈式で三村申吾知事に目録を手渡しました。もう隠れてする必要はありません。

実行章仕掛け人

「小さな親切」の本質を打破して、マンネリ化を打破して、

匿名の対象者に実行章を送るといふアイデアを出したのは、当時青森県本部の事務局長だった安達幸平さんでした。どんな狙いで企画を立案されたのでしょうか。

「青森県本部も30年ほど活動を続けてきて、各方面のご助力もいただき、例えば『春のクリーン大作戦』では1,000団体以上の参加をいただけるなど活動は浸透してきています。

「今年の初競りでトップとなり、値段もよかった。子どもたちのために使ってほしい」という竹内さん。自分の受けた幸運をお裾分けしていくから、また幸運が訪れるような気が

します。取材の帰り道、大間崎を見ました。晴れていても津軽海峡に吹く風は冷たく、どこか荒廃とした風情もあります。でも、行きかう人々は温かく、

力強さを感じます。厳しい自然がある故に、人のやさしさも引き出されるのかもしれませんが。竹内さんは、その象徴のような感じがしました。

ただ、その反面長く続けていきましたと、当初の担当者が引退されますので、この活動の本質が伝わりにくくなります。そのままでは形骸化しそうです。危機感を持っていました。「小さな親切」運動は、単なる町の清掃活動を目的としたものではないですからね。ですから、何か目新しい企画はできないかとずっと考えていました。そんな中、『大間のマグロ漁師』の話を知ってピンとききました。注目度も高く、子どもたちが登場する話です。竹内さんのなされていることは「小さな親切」という範疇を超えていますので恐縮でもありますが、その心意気を県下に伝えるという意味もこめて、実行章をお渡ししたのです」実行力を伴ったアイデアマンの安達さんらしいですが、「小さな親切」運動の必要性を深く認識しているからこそ発想できた企画だ、と感じました。